ホットな福祉情報紙
はあとふる・ふくしま 別冊 福島県災害ボランティアセンター通信
Vol.17 2011年10月17日発行

福島県各地に、
全国から様々な形の応援が寄せられています！
そんな頼れる皆さんからのメッセージをお伝えします。

福島へのラブレター

フリーアナウンサー
二瓶　由美さん
（仙台在住・いわき市出身）

震災後、本当にいろんなことがありました。そのなかでよかったと思える事が一つあります。それは人との繋がりが深まったこと。ライフラインが完全麻痺する中、近所の人と顔を合わせる度に情報を交換し物資を分け合い、それがどれだけ心の支えになったか。人との絆は、地震も津波も壊す事はできません。風評被害にしろ放射能にしろ、これに立ち向かえる最大の武器は「人との絆」、これに尽きるのではないでしょうか。震災をきっかけにできたご近所とのつながりをこれからも大切に育てていけたらいいなあと思っています。

ロイター編集局　記者
アントニー・スロドコフスキーさん
（東京在住・ポーランド出身）

震災後、県内で取材してきた私には、二つの驚きがありました。一つは、外国人記者へ対する率直でオープンな姿でした。辛い経験をしている方でも、丁寧に自分の気持ちを説明していただきました。「子どもたちの健康は心配だけど、行政を信用できない」「日本のメディアが私たちの悩み事を取り上げない」と語る彼らには原発問題の収束だけでなく、悩みを聞き相談に乗れる「信頼できる存在」が不可欠であると気づかされました。二つ目は、その状況が震災から半年が経っても変わらず深刻化していることです。瓦礫片付けや除染は復興の出発点であるが、心理的支援、地域の絆の強化、雇用のサポート等が同等に大切なのではないかと、取材を重ねた結果強く感じたのです。忘れられがちの「ソフト面」の必然性を訴え続けることは「信頼できる存在」としての地位を取り戻すべく、国内のみならず海外メディアの重要な役割だと思います。

リレーエッセイ

奪われた「生活」を「ふるさと」を取り戻すために

福島大学災害復興研究所
丹波　史紀

3月11日の東日本大震災は、地震・津波に加え、原子力発電所事故により福島県では多くの方々が避難生活を余儀なくされています。政府の示した警戒区域等の設定によりふるさとを離れざるを得ない方、放射能汚染の値が高いなどの理由により避難された方など、県内外に多くの方々が避難されています。

見通しの立たない避難生活によって、多くのご苦労をされているみなさまが一日でも早くふるさとに帰り元の生活に戻ることができるよう、国・東京電力が必要な措置をとるとともに、福島県民あげてふるさとを取り戻す取り組みが必要です。

この間福島大学では、災害復興研究所を4月に立ち上げ、避難所や仮設住宅での調査を行うとともに、被災されたみなさまの生活改善に寄与するための取り組みも進めています。6月と7月には、東京で避難生活を余儀なくされた方々約200世帯からアンケート調査を行い、避難生活上の課題、「二重生活」の実態、今後の帰還に向けた意識などを調査しました。また9月には、原発周辺自治体である双葉8町村にお住まいだった住民のみなさま（全世帯）を対象にした実態調査を自治体と連携して取り組んでいます。

こうした調査では、「早く我が家に帰りたい。現在病院に通っているが、健康に不安」という声や、「政府、関係機関で帰宅時期を示してほしい」などの声とともに、家族が離ればなれに生活せざるを得ない方からは、「離れて生活していると家族との意思疎通がうまくいかず衝突してしまう」などの意見もたくさん寄せられています。

調査を通じて明らかになったのは、多くの方々が「ふるさと」に戻りたいという意志を強く持ってらっしゃるということです。同時に、高い放射線量や除染作業など、いつ戻ることができるのか見通しの立たない事への不安を感じていることです。

これから復興に向け長い道のりが続きます。うつくしい福島の大地を一日も早く取り戻すことができ、避難されている人、そして福島県民のすべてが震災によって奪われた生活を取り戻せるよう努力して参りましょう。

参加者募集!! 第20回 全国ボランティアフェスティバルTOKYO

詳しくはコチラ ▶▶▶ http://volunteerfestival.jp/

日本最大のボランティアのイベントが東京で開催されます。一人ひとりが自分らしさを大切にして、さまざまな形でボランティアに関わっていくことが、これからの社会をより強く、しなやかで、暮らしやすいものにする。そんな発見ができる2日間にしたい。60のワークショップのなかには東日本大震災における被災地支援とボランティア活動を考える分科会も多数企画されています。関心あるテーマを選んでおおいに語り合いましょう。

- ●テーマ：「市民（わたしたち）がつくる、強くしなやかな社会」
- ●開催日：2011年**11月12日(土)、13日(日)**
- ●会　場：12日(土)…両国国技館、江戸東京博物館、国際ファッションセンター　ほか
  13日(日)…青山学院大学、国連大学、東京ウィメンズプラザ、こどもの城　ほか
- ●主　催：第20回全国ボランティアフェスティバルTOKYO実行委員会
  東京都社会福祉協議会 東京ボランティア・市民活動センター
  「広がれボランティアの輪」連絡会議　全国社会福祉協議会
- ●後　援：厚生労働省、文部科学省、東京都、墨田区、渋谷区、国連ボランティア計画
- ●参加登録料：3,000円（大学生以下無料）　※交流会費は別途（3,000円）
- ●お申し込み方法：公式ウェブサイト　**http://volunteerfestival.jp/** の「参加お申し込みフォーム」に必要事項を記入してお申し込みください。

【申込み〆切】　2011年**10月28日(金)**　※定員に達した分科会もあります。

お問い合わせ先（実行委員会事務局）
東京ボランティア・市民活動センター　〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1 セントラルプラザ10F
E-mail info@volunteerfestival.jp　TEL 03-3235-1171　FAX 03-3235-0050

こんにちは、生活支援相談員です！　田村市社会福祉協議会

何をどのようにすればよいのか雲をつかむような話でした。4ヵ所 360戸 1,045人の訪問、必要な入居者のデータ収集から始まり、3名の顔を知ってもらうため、顔写真入りのチラシを作成し、配布方々訪問を始めました。

仮設住宅に入居している方々は、狭い、雨漏りがする、隣の声が聞こえるといった問題を抱えながらも、地域単位で入居しているため孤独感やプライバシーについてはさほど心配がなく、なおかつ家がある方々のため、原発事故の収束はいつになるのか、いつ帰れるのか、除染はどこまでやるのか、補償はどうなるのかといった相談が主なものです。

ボランテイアセンターとの連携もスムーズで、日々協力しながら支援活動に取り組んでおります。

今後も可能な限り毎日訪問をし、何を望み、何が問題になっているかの把握に努め、行政等とのパイプ役として、自立に向け被災者とともに頑張っていきたいと思います。

左から　渡辺　智子、泉　清司、吉田　博

編集後記

震災直後は「半年や1年でどれだけ復興が進むのか」と不安でしたが、今は多くの人々の活動に支えられて力強く復興が進んでいると感じます。自分もその一員になれるよう活動していきたいです。（佐藤美奈子）

最新情報はホームページでご覧ください！
http://www.pref-f-svc.org

がんばろう、日本。
がんばろう、東北。
がんばろう、福島。

次号は11月7日発行です。